

乳呑児 1431<sup>p</sup>  
乳飲児

17世紀 18<sup>p</sup>  
2034-1/2 2,033<sup>p</sup>-1/2

龍王の玉の輿

乳呑児を抱いた愛姫の心は、悲しみて一杯

たつた。

遷都の時に、宇治から新しい邪馬台国の都

へ上り、洛水（堀川）にかけ渡された天浮

橋の袂で、そして夫梯儂を見送った愛姫は、

その後、生き別れを想い、泣きながら

彷徨い歩いていった。自然の夫

梯儂様

て胸が潰れんばかりの

切なく辛く愛姫は、どこをどう歩いたの

だろうか。それと意識のないのに、いつか

夫を尋ねて住江の浦の端へと辿り着いてい

た。（山城国風土記逸文）へ宇治橋姫✓糸

参照

「まあ、いつの間に、住江の浦へやつてき

たのでしよう。あの方がおいでにならない

とは分かっているのに」

梯儂との楽しい思い出に満ちた館の内に、



タイム 135 20G 24  
場43 凡主記 418<sup>P</sup>

2.033<sup>P</sup> 3/2

135  
20G  
24

宇治橋姫

梯儂の姿は無く、うつろな空間だけがあつた。  
そーて浜辺にも、いとしい君の呼ぶ声はせす  
ただ朝風がそよそよと吹いてゐるばかりだつ  
た。  
ふと、向こうの方を見やると、住吉の小島が  
緑濃く美しい。影を海面に映してゐた。その小  
島の頂には、赤女が梯儂と共に住んでゐた家  
があつた。  
「これから、どうしたらいいのでしょーう」  
船に乗って、故郷の宇治へ帰ろうかとも思った  
の。お家に立ち寄つて、  
「……いえいえ、せっかく住吉に来たのだ  
もの、ちよつと赤女様へ御挨拶しなけれ  
ばいけないわ。でも、赤女様はおいでか  
ら」  
愛姫は、幼な子をあやしながら、海辺に  
歩いて歩き、そーて橋を渡りて、老女は「妻  
の謙称」の館にやってきました。（「山城国風  
土記逸文」へ宇治橋姫へ条参照）  
では、ここに、「山城国風土記逸文」へ宇  
治橋姫へ条の全文を掲げておこう。



2.034<sup>p</sup>-1/2

42770K 412.4.19⑥

風土記418<sup>r</sup>

1行下げる。

山城國風土記云宇治ノ橋姫、  
土尋ノ和

布ヨツハリニ願ケル程ニ、  
ヲトコ海邊ニ尋行

テ、笛ヲ吹ケルニ、  
龍神メテ聳ニトレリ。

姫、夫ヲ尋テ海ノハタニ行ケルニ、  
老女ノ家

アルニ行テ問程ニ、  
サル人ハ龍神ノ聳ニ成

テオハスルガ、  
龍宮ノ火ヲイミテ、此ニテ物

ヲ食スルナリ。  
ソノ時ニミヨルト云ケレバ、

カクレ居テ見エニ、  
龍王ノ王ノ輿ニカレテ

來テ、供御ヲ食シケリ。  
女、物語ヲテナク

別レケリ。  
遂ニハカヘリテ、彼セニツレ

タリ。

とある。  
昆沙門堂本古今集註「風土記」

日本古典文学大系、岩波書店、四一八頁参照

米

ところ、  
ニニに老女と記されてゐる

か、  
日老セロといえは文字通り



H12.11.9 勝木さんに尋ねた。

中島さんは、プロパ- (15才) だった  
大阪小尾に居た由。(註) 浦井 911  
フル-「川野小」フル 911

次頁  
から

H11.10.27 (金)

2,034 P.2/2 類語大辞典 979P  
2. 小林 (老母) 783 妻・セ房のニ  
よく言っていた。セ房は中2といっていた。

モセ 2353 老年のセ  
車採 1892P  
娘の子 2467-3

う。(「日本類語大辞典」講談社へ妻。漢  
和辞典「小林信明、小学館、へ老婆」参照  
現在でも地方によつては「孫がいるわ  
けでもないのに自分の妻の」を殊更なまで  
に謙称して、「うちのバアさんは○○○」等  
々と言つてゐるのを聞くことがある。こ  
れは古代(風土記)が書かされた頃、ある  
以前からの謙虚を美德とする我が国の習俗  
の名残なのであらうと思われ。

「年老いた女性」という意味に解すのが普通である。  
しかし、この物語では、  
「老女」は「妻」  
のことであらう、と考えたい。  
そして、「山城国風土記逸文」へ宇治橋姫  
条に記されてゐる「老女」は、梯馬の妻「赤  
女」を指してゐる、と解釈してみたい。  
なお、自分の妻のことを謙称して、拙妻・  
愚妻・醜妻・老婆などと称する場合もあるとい



前頁

244



2035<sup>P</sup> - 1/2

天にも昇る心地  
云 1539<sup>P</sup>

凡そ 418<sup>P</sup>

2034<sup>P</sup> - 1/2

(八月の日)

(夜明け前)

(不知火)

「然る人は龍神の聲に成つて、まわしたの

です。か、魏暦八月一日の龍宮の火を忌みて、

此にて物を食したいと、おっし、七月末の晦の下さつ

たのですよ。何なら、その時においでになつ

てお会いになるとよろしいわーい。L (山城)

国風土記逸文へ宇治橋姫 (条参照)

愛姫は、この上もなく感激し、仕合わせ

うな面持ちで言った。

「まあ嬉しい。赤女さま、この子か、お父

様にお会い出来るのですね」

赤女も愛姫も、その日が待ち遠しくて、か

たがなかった。

\*



幼い 138P 223P  
幼子 297P

胸に抱いた 2025P

2,036P

隠れていた 418P  
2034P-1/2  
供御 618P  
食物 2197P

「つこもり」  
「つこりのみ」  
という

ついに、その日、魏曆（陰曆）七月、  
晦日（つこもり）がやつてきた。  
愛姫（あひめ）が、物陰（ものかげ）に隠（かく）れて見（み）ていると、  
の玉（たま）の輿（こし）（女（に）王（わ）日（に）御（ご）子（し）の玉（たま）の輿（こし））に昇（のぼ）り、  
来た（きた）梯（はし）偶（ぐ）は、赤（あか）女（め）が心（こころ）を込（こ）めて作（つく）った供（く）御（ご）飲（いん）  
食物（しょくぶつ）をなんとも美味（おい）しそうに口（くち）にし、そして  
食（しょく）事（じ）が済（す）んだとき、優（やさ）しく赤（あか）女（め）の手（て）をとり、  
肩（かた）を抱（かか）りて寄（よ）り添（そ）い、仲（な）睦（むつ）ましく語（かた）りかける  
の（の）だつた。  
愛（あい）姫（ひめ）は、そんな二人（ふたり）の間（あいだ）に突（とつ）然（ぜん）割（わ）つて  
入（はい）る（ミ）となど、何（なに）分（ぶん）にも躊（ためら）躇（ち）あれて、何時（いつ）ま  
でも愚（ぐ）図（ず）愚（ぐ）図（ず）と隠（かく）れてい（い）るは、かりであつた  
と、そんとき、今（いま）まで愛（あい）姫（ひめ）の腕（うで）の中（なか）です  
やすや寝（ね）入（い）つていた幼（お）見（み）か目（め）を覺（さ）ました。  
「あや。稚（や）見（み）の声（こゑ）がする。」  
梯（はし）偶（ぐ）は、驚（おどろ）いてあたりを見（み）廻（まわ）した。そして、  
屋（や）の片（かた）隅（すみ）に、幼（お）い子（こ）を抱（だ）き締（し）めてい（い）る愛（あい）姫（ひめ）  
の姿（すがた）を見（み）付（つ）けると、驚（き）喜（よろこ）びて、  
「おお。そこに居（い）るのは愛（あい）姫（ひめ）ではな（な）いか。」



凡士記418<sup>P</sup> 5/14  
帰館 2/3/9

2037<sup>P</sup>

ふみで 国語 11/3<sup>P</sup>  
一杯  
2033<sup>P</sup>

241年春つわり(4月) つわり妊娠2~34月  
2010<sup>P</sup> 241年に男児誕生 11月 現在 1~24月  
242年7月1日 84月

愛姫は、……こっちに来て、よく顔を見せてお  
くれ。と言った。  
「梯偶様。……ほら見てやっ下さい。貴  
方様のお子ですよ。もう、はいはいも上手に  
出来るようになってしましたのよ」  
愛姫は、夫梯偶に会えた嬉しさに胸をふる  
わせ、涙ながらに言うのだった。  
この夜、よびてせうは物語りて、東の間  
の再会を喜び、悲しみを打ちあけ、そして泣  
く泣く別れた。  
梯偶は遂には帰って、彼女(龍神リ亀比売  
のこ)であううかに連れ添うのだった。山  
城国風土記逸文へ宇治橋姫(条参照) 588  
こうして、梯偶は泊瀬の白川北岸の煙草や  
かな王宮へと帰還し、……その後、愛姫と  
その子、宇治へ向かう船の上の人となり、去  
つていった。  
住吉の小島には、赤女がたった一人、取  
り残され、たようにポツンと居残った。  
「梯偶様が住吉の館にお帰りになつたと  
き、誰もおいなければ、きつと寂しくお思  
いにな



あかめ

赤女

は

設

庚

国

11

師

ろ

2

2

A hand-drawn diagram of a cell. It features a large, irregular outer boundary representing the cell membrane. Inside, there is a smaller, roughly circular structure labeled 'Nucleus' with a central dot. To the right of the nucleus is a large, clear, oval-shaped area labeled 'Vacuole'. The space between the nucleus and the vacuole is filled with small dots, representing cytoplasm. The entire diagram is drawn with simple black lines on a white background.

世

す

井

た

た  
た

作

0

そ  
り  
と

あ

7

本

|    |  |
|----|--|
| 0  |  |
| 75 |  |

✓

一  
樓

佛

低

①

再

来

を

待

ち

位

洗

|   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|

|   |  |
|---|--|
| の |  |
| た |  |
| 7 |  |
| た |  |
| 0 |  |

来  
玩  
次  
已  
12  
分



こと

2.039P-1/3

何の

龍神の悲しみ

それから数ヶ月経った頃、住吉の小島の赤

女のところに、

梯傷が姿を見せた。

洛陽の貴公子梯傷は、赤女を慰めようと

何かと手を尽くし、

い宮殿を後にして、慄然とたゞく出向いてき

たのだった。

「まあ、あなた。梯傷様、――」

思ひもかけない夫の来訪に、赤女は絶句し

喜んだ。

「――そんなことか、二度・三度と続いた

\*



ふたごころ 二心 1944P

とこのころ 殿御 1612P  
西丸用 1054P

2.039P-2/3

ゆー うー  
揺りかた 2263P

いと 愛しい 2042P

ういひを愛して 2039P-3/8  
密やか 1868P

あ、涙がいっぱいあふれていた。  
へああ今日もまた、私ただ一人を宮中に残  
して、梯僊様はいそいそとお出掛けになつて  
しまわれた。私は、梯僊様お一人を、こんな  
にまでもお慕ひし、大切に想つてゐるのに、  
なるの、梯僊様は、どうして二心をお持ちに  
なるの、でしよう。日御子の悲しみと苦悩は、日  
まじに、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あ、お引き留めする手だてはない。  
女王日御子が見つける鏡の向うの女人の目  
方へ、どんだん傾いてゆくのが分かるわ。私は  
愛しい梯僊様の心が、若くて美しい赤せの  
女のところへ通つておいでになるのよ。私の  
へ私は知つてゐるわ。梯僊様は、佳吉の赤  
は、あかなかつた。  
かし、梯僊の度重なる密やかな外出は、  
女王日御子の心を、ひどく悲ませた。



2,039<sup>P</sup>-3/3

武内宿禰 紀上316<sup>P</sup>

つばや 元 1496<sup>P</sup>  
咳く

ものかいら  
日御子は、誰に言うとなく、そつと咳いた。  
「女王日御子の御心の内のお苦しみをお察し  
し申し上げます。私なりに、梯儔様を禁中に  
お留めする方策を考えてみることに致しまし  
よう」  
見子に見かねた武内宿禰は、こう言わずに  
おれなかつた。

\*



2.040<sup>P</sup>-1/3

大勢 2045<sup>P</sup>

おむき 用向 2273<sup>P</sup> 庫 1381<sup>P</sup>

こうして、宮城門の監視が、それ迄とは較  
べようもないほど、厳しくものとなつた。

つまり、

「何人といえども、格別の用向きの無い者

を、決して通してはならぬ」

と、武内宿禰が厳重に申し渡したからであつた。

扉を開ざした宮城門を差し固める門衛達は

梯儼がやつてくると、バツバツと大人数でその前に

立ち、はだかり、通そうとしなかつた。

「高貴なお方かこの門を通行なさるときに

も、それなりの手順をいむことが必要なの

です。自由気ままにお通りになつてよいもので

はありません」

だが、力づくで隔てられれば隔てられるほ

ど、梯儼の心は身の束縛を厭ひ、――赤女

の健気なまでの優しい心根を慕つた。

＊

＊

＊

＊

通門のうちの一つ、割合の警固の手薄な北面



職掌 1117 役月

紀下566

門衛 2206

2,040-2/3

中びえ 指差す 2260

かわふねえ 川船 480

宮城

の門を強引に通り抜けた。そして、外郭  
城東面の門をも無理やり押し通ると、外郭城  
東壁に沿って南下し、洛水（堀川）を渡り、  
泊瀬の白川を目標した。  
「船頭、急いで曹主下り、河口へ行ってくれ。  
礼は充分にする。――え、何。私の言  
葉が分からないのか。とにかく、急いで  
くれ」  
「梯儼は、もう、小船に飛び乗っていた。船  
頭は、梯儼が指差す下流に向かって、船をツイ  
と押し出した。  
川船は、飛沫をあげながら、泊瀬の白川の  
急流を矢のように下っていった。  
まさにその頃、常になく甚々しい武内宿禰の  
声か、門衛達、および門の警固を職掌とする  
豪族達の上に響き渡っていた。  
「あれほどきつく申し付けておいたのに、  
どうして梯儼様をお通ししたのだ。―かも、  
今頃になってようやく私に知らせてくるとは



(このように) 小島を見ては佐吉のいふ  
② 16852-1/2

2040<sup>P</sup>-3/3

かんせんえ  
官船 497<sup>P</sup>

みずすめ  
水降 553<sup>P</sup>

リョウけん  
料簡 2289<sup>P</sup> (こ)

リョウけん  
料簡 2325<sup>P</sup>

いっただいどういう料簡なのだ。早く行け。行  
つて梯傷様を、有無を言わさず車水戻して来  
い。さもなくば、どういふことになるか、覚  
悟しておけ。さあ、行くんだ。同時に  
門衛達ばかりでなく、近衛の兵庫もはに  
か小たように宮城を飛び出していった。  
「梯傷様の行き先は分かってゐる。瀬川の  
川の河口へ出て、佐吉の小島を目指せ」  
門衛達や兵庫は、白川バりに引き上げられ  
ていた官船を次々と、大急ぎで水際に浮かせ  
た。そして、我々勝ちに、白川を下っていつ  
た。  
米  
梯傷は、白川河口で船を乗り継ぎ、佐吉の  
小島へと急いだ。沖の方、遙かなたに小島  
く矣のように見えていた。その小島が、次第次  
第に近づいてきた。  
へまもなく、赤女に会える。もうすぐだ。  
梯傷の心は逸った。



はやぶね 早船 1821<sup>7</sup>  
こと

2.041<sup>P</sup>-1/2

改行

そんな時、ふと梯僊は後方をふり返つた。  
すると驚いたことに、たくさんの早船が、  
間近に迫って見えた。  
「船頭よ。頼むから、もっと急いで着いで  
おくれ。あの小島までだ。もう少し早くし  
梯僊の声は、震えていた。  
梯僊の願いは空しいもので、かなか  
った。早船は、刻一刻と、その距離を縮めて  
くる。  
そして、ついに達いつかして、まうた。  
「どうぞ梯僊様。宮殿へお帰り下さい」  
「なぜだ。なぜ私を引き留める。私が何処  
へ行こうと、好きにさせておいてくれ」  
「いいえ。今日のところは、どうあっても  
お帰り願うという存じます」  
「私は、お前様方の言う通りにはなり  
ませぬぞ。さ、船頭よ。あの住吉の小島に、  
この船を着けてくれ」  
梯僊の声に励まされて、船頭は、再び漕ぎ  
始めた。



はら ⑦2122 振振の引き留め平を振振り出うおにて  
松い除けは1822

2,041<sup>P-2</sup>/<sub>2</sub>

差1回すえ 888<sup>9</sup>  
子立 152<sup>9</sup>  
若若 1686<sup>9</sup>

音声 云339<sup>0</sup>  
気と香む 1751<sup>P</sup> そとちる 云1305<sup>9</sup>

米

「梯偽殿。そうはさせませぬ。これ、そこ  
なる船長よ。命が惜しければ、その船をここ  
へ横づけにしますかよい」  
言葉は丁寧ながら、その物凄く大音声に  
圧倒され、すっかり気を奪われ、船頭は「  
己の船を早船の方へと近づけていった。  
「さあ、梯偽殿。最早この片で逃げます。  
こちらの船に乗り移っていただきとう存いま  
す」  
梯偽は、為すバキ手立もなく、苦しいげに  
おつつりと押し黙ったまま、差し出された手  
を払い除け、自ら、早船の人となった。  
この水上、船頭に迷惑をかけたくないと思  
ったからであった。  
早船は、一漕ぎの意に反し、一漕ぎ  
一漕ぎ、住吉の小島から遠ざかっていった。



560.2/12  
H10.8.7

ふけ 歌 3 1933<sup>p</sup> 1508<sup>p</sup>  
つたし すぎない

2.042<sup>p</sup>

若くて 2039<sup>p</sup>-3/3

「一方、梯儼の歸りを待ち侘びる日御子の心  
は、千々に乱れ、  
く揺れ動いていた。  
「あのお方は、赤女のところへばかり行き  
たが、おいでになる。今日もまた、私を置  
いて、お出かけになつてしまわれた。若く、  
艶かしい赤女のこと、――ああ、私の背  
の君のお心は、一杯なのよ。  
もーかいたら、もはや私を――お嫌い  
になつてしまわれたのかしら。いいえ、そん  
なことはないわ。  
私がこれほどまでにお慕ひしているのです  
もの、――あのお方だつて、私のことを嫌  
つておいでになる筈はないわ。  
だが、宮城に歸つて来た梯儼は、つれなく  
無愛想に、  
「気分が勝れないから、――はらく、そつと  
しておいで下さうぬかし。  
と言ひ、一人、櫛櫛と物思ひに耽るのだつた。  
日御子は、居た堪れない思ひであつた。  
「梯儼様。私の梯儼様」



2,043

いさ  
零主心  
元1934

おん  
悶悶  
元2209  
元2081

ひたむ  
直向きな

ひたむ  
直向きな

もと  
元の通りに

ひのみに  
日御子 ~~の~~ 途な心は、梯儼の心を取り戻し  
たいとのみ願った。

あかの  
「赤女が、~~赤女~~が私の夫の心を掻き乱すの  
だわ。赤女は、私の大切な、大切な御方を奪

っていくのよ。ああ、―――どうしたらいい  
のでしょ

ひのみに  
日御子の目には涙があつた。夫梯儼のふさ  
ぎ込んだ様子を見るにつけても、悲しくてな

らなかつた。  
「赤女がごく近く ~~の~~ 魏の館に  
住んでいるからこんな

ことになるのよ。  
なければ良いのよ。愛姫が北の宇治へ帰って  
~~い~~ ったように、赤女が南の設馬国へ帰って

しまえば、―――梯儼様のお心は穏やかにな  
らかたなうて、きつと ~~の~~ 私のところへ戻って

きて下さるわ  
ひのみに  
日御子は、強く頷いた。

「ええ、そうよ。赤女を設馬国へ帰して

まえばいいのよ」  
トル



剣幕 元719<sup>ア</sup>  
激 元1778<sup>ア</sup>

万②-385<sup>ア</sup>  
几上 元470<sup>ア</sup>

2.044<sup>ア</sup>

就いては、元1471<sup>ア</sup>  
したがって、よ<sup>ア</sup>それ故に

元1627<sup>ア</sup>  
リニわ

ていまえばいいのだわ  
＊  
朝廷から派遣されてきた役人は、赤女に言  
った。  
「全吉の魏の館、つまり貴女が住んでおら  
れるこの建物を、近日中に取り壊すまうこ  
とになりました。就き無それ故、赤女殿にお  
かれましては、早急に荷をまとめ、二三日中  
に設馬国へお帰りいただきたい」とのお達  
しでございます。  
「なんでですか、一ぱい、一ぱい、一ぱい、  
全く、寝耳に水の一方的な通告に、赤女は  
驚くばかりであった。  
「しかし、その官吏の目の奥をじっと見詰  
めて、赤女はきっぱりと言った。  
「いやよ。私は帰らないわ。私は、いつま  
でもここに居させてもらいます。  
赤女の取りつくすべもない敷い、剣幕に恐



20



梁 1825' 棟(棟本) 2156'

2013 正43年(2424) 7月晦日から数ヶ月後に赤女を訪ねた。  
大勢 1 其の後2、3回 佐吉を訪ねた。  
2040 1/3 其の後2から、冬か?

かいいたい  
解体 2 356' 目を白黒 2462'

2.045'

小をなした役人は、目を白黒させながら、  
 「そんな事をおっーやられても困ります。  
 これは命令なのですから。それでは、誠に不  
 本意なことでございしますが、十日後に、こ  
 の館の解体を行いますので、御承知おき下さ  
 いし  
 と言った。  
 「そーて、こう言ひ援へた役人は、そそくさ  
 と、佐吉の小島から退散した。  
 \*  
 その日の朝、人夫達が大勢やってきて  
 命ぜられた通り、魏の館の取り毀しにかかった  
 「ドーン・ドーン」  
 「屋根や、梁や、棟木などが、次々次々と地  
 面をたたき、土煙りが折からの風に煽られて  
 空中に舞い上がった。  
 「やめて。ぬ、お願いだから、そんなこと  
 をするのは止めて頂戴し  
 狂おしいばかりの赤女の悲痛な声が、ただ



2046<sup>P-1/2</sup>  
 顔る (いれる) 625<sup>P</sup> 思い出の愛唱歌集 (シルの本) 147<sup>P</sup> 垣は歌めれ7  
 無惨 (とほろ) 2079<sup>P</sup> 取りさう 629<sup>P</sup> 万② 385<sup>P</sup> 末25<sup>P</sup> 院いた家村路く

空 <sup>ある</sup> ーく流 <sup>なが</sup> れてい <sup>い</sup> った。  
 こ <sup>こ</sup> う <sup>う</sup> ー <sup>う</sup> て <sup>て</sup> 次 <sup>さい</sup> 第 <sup>だい</sup> に <sup>に</sup> 住 <sup>す</sup> 吉 <sup>めい</sup> の <sup>の</sup> 家 <sup>いえ</sup> は <sup>は</sup> そ <sup>そ</sup> の <sup>の</sup> 形 <sup>かたち</sup> を <sup>を</sup> と <sup>と</sup> ど  
 め <sup>め</sup> な <sup>な</sup> い <sup>い</sup> ま <sup>ま</sup> で <sup>で</sup> に <sup>に</sup> な <sup>な</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> っ <sup>っ</sup> た <sup>た</sup> 。

光 <sup>こう</sup> 景 <sup>けい</sup> <sup>で</sup> あ <sup>あ</sup> っ <sup>っ</sup> た <sup>た</sup> 。

そ <sup>そ</sup> れ <sup>れ</sup> は <sup>は</sup> 、 <sup>あ</sup> 赤 <sup>あか</sup> 女 <sup>め</sup> に <sup>に</sup> と <sup>と</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> 、 <sup>あ</sup> あ <sup>あ</sup> ま <sup>ま</sup> り <sup>り</sup> に <sup>に</sup> も <sup>も</sup> 無 <sup>む</sup> 惨 <sup>ざん</sup> な  
 血 <sup>ち</sup> の <sup>の</sup> 気 <sup>け</sup> が <sup>が</sup> す <sup>す</sup> っ <sup>っ</sup> と <sup>と</sup> 引 <sup>ひ</sup> い <sup>い</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> 、 <sup>あ</sup> 赤 <sup>あか</sup> 女 <sup>め</sup> は <sup>は</sup> そ <sup>そ</sup> の  
 場 <sup>ば</sup> に <sup>に</sup> へ <sup>へ</sup> た <sup>た</sup> へ <sup>へ</sup> た <sup>た</sup> と <sup>と</sup> く <sup>く</sup> ず <sup>ず</sup> お <sup>お</sup> れ <sup>れ</sup> 、 <sup>い</sup> 意 <sup>い</sup> 識 <sup>し</sup> を <sup>を</sup> 失 <sup>う</sup> な <sup>な</sup> 。

や <sup>や</sup> が <sup>が</sup> て <sup>て</sup> 気 <sup>き</sup> が <sup>が</sup> つ <sup>つ</sup> い <sup>い</sup> た <sup>た</sup> と <sup>と</sup> き <sup>き</sup> 、 <sup>あ</sup> 赤 <sup>あか</sup> 女 <sup>め</sup> は <sup>は</sup> 設 <sup>せつ</sup> 馬 <sup>め</sup> 国 <sup>こく</sup> ( <sup>さつ</sup> 薩  
 摩 <sup>ま</sup> 国 <sup>こく</sup> ) <sup>へ</sup> 向 <sup>む</sup> か <sup>か</sup> う <sup>う</sup> 船 <sup>ふね</sup> の <sup>の</sup> 中 <sup>なか</sup> に <sup>に</sup> 横 <sup>よこ</sup> た <sup>た</sup> わ <sup>わ</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> た <sup>た</sup> 。

私 <sup>わたし</sup> は <sup>は</sup> 、 <sup>す</sup> 住 <sup>す</sup> 吉 <sup>めい</sup> の <sup>の</sup> 浦 <sup>うら</sup> に <sup>に</sup> 居 <sup>い</sup> な <sup>な</sup> け <sup>け</sup> れ <sup>れ</sup> ば <sup>ば</sup> な <sup>な</sup> ら <sup>ら</sup> な <sup>な</sup> い <sup>い</sup> の <sup>の</sup> よ <sup>よ</sup> 。

あ <sup>あ</sup> の <sup>の</sup> お <sup>お</sup> 方 <sup>かた</sup> が <sup>が</sup> お <sup>お</sup> 帰 <sup>かえ</sup> り <sup>り</sup> に <sup>に</sup> な <sup>な</sup> る <sup>る</sup> の <sup>の</sup> を <sup>を</sup> 待 <sup>まち</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> な <sup>な</sup> く <sup>く</sup> て  
 は <sup>は</sup> い <sup>い</sup> け <sup>け</sup> な <sup>な</sup> い <sup>い</sup> の <sup>の</sup> よ <sup>よ</sup> 。

船 <sup>ふね</sup> を <sup>を</sup> 戻 <sup>もど</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> 。

一 <sup>い</sup> か <sup>か</sup> し <sup>し</sup> 、 <sup>な</sup> 近 <sup>き</sup> き <sup>き</sup> 叫 <sup>さけ</sup> ぶ <sup>ぶ</sup> あ <sup>あ</sup> わ <sup>わ</sup> れ <sup>れ</sup> な <sup>な</sup> 赤 <sup>あか</sup> 女 <sup>め</sup> を <sup>を</sup> 乗 <sup>の</sup> せ <sup>せ</sup> た <sup>た</sup> 船 <sup>ふね</sup>  
 は <sup>は</sup> 、 <sup>ま</sup> 真 <sup>ま</sup> 一 <sup>いち</sup> 文 <sup>もん</sup> 字 <sup>じ</sup> に <sup>に</sup> 、 <sup>な</sup> 南 <sup>なん</sup> へ <sup>へ</sup> 南 <sup>なん</sup> へ <sup>へ</sup> と <sup>と</sup> 下 <sup>くだ</sup> っ <sup>っ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> っ <sup>っ</sup> た <sup>た</sup> 。

な  
 破 <sup>は</sup> 壊 <sup>かい</sup> さ <sup>さ</sup> れ <sup>れ</sup> 下 <sup>くだ</sup> っ <sup>っ</sup> た <sup>た</sup> 消 <sup>しょう</sup> 滅 <sup>めつ</sup>



H30(2018)5.21(月)~5.23(4回)

IF

2,046<sup>P</sup>-3/2

寂い } 2900<sup>P</sup>  
林い

えぼろかえ  
側仕 21314<sup>P</sup>

「赤<sup>あか</sup>女<sup>め</sup>様は、設<sup>せつ</sup>馬<sup>め</sup>国<sup>のくに</sup>へお帰<sup>かえ</sup>りあそばされた  
そうでございます」  
側仕<sup>そばつか</sup>えの者<sup>もの</sup>が、梯<sup>てい</sup>儼<sup>げん</sup>に告<sup>つ</sup>げた。  
「え、赤<sup>あか</sup>女<sup>め</sup>はもはや住<sup>すみ</sup>吉<sup>のえ</sup>に居<sup>い</sup>ない」と申<sup>もう</sup>す  
のか」  
梯<sup>てい</sup>儼<sup>げん</sup>は驚<sup>おどろ</sup>いた。  
梯<sup>てい</sup>儼<sup>げん</sup>は、もう赤<sup>あか</sup>女<sup>め</sup>に会<sup>あ</sup>えないのかと思うと  
寂<sup>さび</sup>しくて、かたがなかつた。  
とはいえ、梯<sup>てい</sup>儼<sup>げん</sup>は一方<sup>いっぽう</sup>で、  
一番<sup>いちばん</sup>良<sup>よ</sup>いのかもしれない。✓  
とも思<sup>おも</sup>った。

\*



豊栄登り 12月  
旧の起矢; やま 3-1/4

2,047P  
正43年 2013P

560.2.15

三國志(一) 吉川英治 235P  
2046-1/2

万4-121P  
#3788  
小町2号 189P

遷都以後、日が経つにつれて、洛中は追々に王城街の繁華を呈し、宮城門を出入りする貴人達は、金花の璽に華麗な簾を垂れこめ、行装の綺羅と勢威を誇り示した。  
こうして、人々は新しい都に馴染み親しく、でゆき、一年が暮れ、天の正月・冬至の日を迎える盛大な儀式が厳粛に執り行なわれ、舊暦の新年を祝う大きな喜びが人々の胸の内に満ちあふれた。  
二月、魏暦の正始四年(二四三)となった。  
やまと 後には 國のまほらま 甕づく 青垣 山籠  
女王國 邪馬台國は、新都城を中心として、まるで旭日がきらきらと輝きながら天空へ舞いのほろかのように、いよいよ豊栄の度を増してゆく。  
とやんな時、都の内に、ある噂がパツと伝まつた。  
設馬國へ無理やり連れ去られておゆきに

果て無き想い  
限りなき想い  
小町2号 189P



とりぬき  
取毀す 1629?

2048<sup>P</sup>

岩に屋根を差し掛けて下

なつた赤女さまが、突然、住吉の甫にふらつ  
と引き返してお見えになつたのですってよ  
「あら、もう住む家も向もかもが、すっかり  
取毀さ水たといういやない。赤女様はいかに  
身を置かぬおつもりなのかしら」  
「赤女様をお引き受けして屋敷の内にお留め  
したら、事が事でしょう。大伴武以連様  
も、ほとほと困りはてておいでなすのだそ  
うよ」  
「まあ、お可哀相な赤女様。それでは、住  
「そうなのよ。赤女様は赤女様で  
「住吉の小島に居たいのよ」  
とおっしゃって、小島の南側の橋のたもと  
の岩陰に蹲りながら寒い夜を過しておられ  
るんですって」  
「せめて食物とか、寒さ凌ぎの  
「持って行ってあげていさうだけど、  
赤女様はもうすっかり痩せ細っておられ  
泣き腫れた目が異様に光って、何とも身  
立つほどの形相になつてしまわれたのだそ  
う

2039<sup>r</sup>  
-1/3 5f







2.049<sup>1</sup>-<sup>2</sup>/<sub>2</sub>

はす 辱かめえ 1787  
こと

米

隣水まかに

いし  
日御子は、夫梯傷が深く想いを寄せている  
赤女を辱かめえようなことだけは、たくな  
いと思つた。こんなふうになつてしまった  
へどうしてこのようになつたのか  
う  
事の思ひぬ展開に、日御子は心を痛め、  
赤女を辱かめえに思わぬおれなかつた。  
2049<sup>2</sup> 25



→ S60.2.16 (伊都国 15/5) 1523-1/2

1523-1/2

2,050

凡そ187, 287

魏志倭 38~39

1523-1/2

11-12

104-121

泄謨公はこう言うと、急ぎ上洛の途についた

とれ、私が行って、此を諫め止めてみる

(第二十一章へ伊都国条に於て既述)

「このまま放っておくわけにもいくまい。と推測して述べてやるとした

神(伊保大明神)として、伊都国の祭神

保郡上岡の里条に見える、出雲国の阿菩大

故われたのであろう、と考えてみた

国式内社伊佐賀神社の、伊保大明神として

理的に相当する所、出雲国へ移され、出雲

尚、この後、泄謨公は、伊都国に祀られ

(泄謨公)の耳もとにまでも達した。魏志倭人伝

か、互いに激しく争っている。伊都国の副官・泄謨公

という醜聞は、皇后と耳梨と







2,051<sup>P</sup> - 2/2

字アキ

字アキ

とある  
とありたまひき。故<sup>か</sup>に宗<sup>す</sup>我<sup>か</sup>富<sup>ふ</sup>といふ  
かし  
水<sup>みづ</sup>の清<sup>きよ</sup>く寒<sup>さむ</sup>きに由<sup>よ</sup>りて吾<sup>あ</sup>か意<sup>い</sup>すかす  
行<sup>い</sup>でま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>に此<sup>こ</sup>の岡<sup>おか</sup>に歸<sup>かへ</sup>きたまふ  
ひと<sup>ひと</sup>へらく下<sup>くだ</sup>品<sup>ひん</sup>太<sup>たい</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>こう</sup>へ心<sup>こころ</sup>神<sup>かみ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>こう</sup>へ  
菅<sup>すが</sup>山<sup>やま</sup>の邊<sup>へ</sup>に生<sup>な</sup>れり故<sup>か</sup>に菅<sup>すが</sup>生<sup>な</sup>と<sup>と</sup>り  
あ

木



次頁半折 まいり 2063P

2.052P-1/2

おやまや 小山山 1917P-1/4  
287P 社蔵三山 絵本の山 96P

参照

神皇と號す。皇の形、覆せたるに似たり。  
なるほど、どうしたわけで、聞いか止んだ。  
のか、詳しくは分らない。  
赤女は、タクマが原の地に身を投げ、そ  
して託麻三山の一つ、小山山(香山)の東  
にある小文な丘に、そつと葬られた。  
その丘の形は覆せた船に似ていた。  
そこで、この丘はやがて御船塚山と呼ば  
れるようになった。また、神皇とも呼ば  
れた。  
と解してみたい。(播磨国風土記揖保郡上岡  
の里条。五万分之一地図へ御船参照)  
人々は同情の心をもつて、神皇を悼み懐か  
しんだ。しかしながら、女王曰、御子への  
遠慮もあり、表立ってこの塚に詣る者はな  
く、いつか、菅が生い茂るにまかせた  
山となつてしまつた。そこでこの山は別名  
菅生山と呼ばれるようになったのか、  
知れない。(播磨国風土記揖保郡上岡の里条  
参照)



異伝が<sup>いでん</sup>あり<sup>あり</sup>、<sup>すか</sup>菅生<sup>ひ</sup>と<sup>ら</sup>いう名<sup>な</sup>につ<sup>つ</sup>いては<sup>は</sup>

「<sup>をが</sup>心<sup>しん</sup>神<sup>じん</sup>天皇<sup>てんこう</sup>が<sup>が</sup>船<sup>ふね</sup>を<sup>を</sup>覆<sup>おほ</sup>せた<sup>た</sup>よう<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>見<sup>み</sup>える<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の

岡<sup>おか</sup>に<sup>に</sup>《<sup>をが</sup>行<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>小<sup>せう</sup>た<sup>た</sup>時<sup>とき</sup>、<sup>こ</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>井<sup>い</sup>戸<sup>ど</sup>を<sup>を</sup>掘<sup>ほ</sup>った<sup>た</sup>。水<sup>みづ</sup>

は<sup>は</sup>甚<sup>いた</sup>く清<sup>さよ</sup>く寒<sup>さむ</sup>くて<sup>て</sup>、<sup>い</sup>喉<sup>のど</sup>を<sup>を</sup>潤<sup>うる</sup>す<sup>る</sup>冷<sup>つめ</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>の</sup>の

水<sup>みづ</sup>は<sup>は</sup>日<sup>す</sup>宗<sup>そう</sup>々<sup>が</sup>我<sup>が</sup>々<sup>が</sup>志<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>。そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>故<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>、<sup>こ</sup>の

山<sup>さん</sup>は<sup>は</sup>、<sup>な</sup>名<sup>な</sup>曰<sup>い</sup>宗<sup>そう</sup>我<sup>が</sup>富<sup>ふ</sup>山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>呼<sup>よ</sup>ば<sup>は</sup>

水<sup>みづ</sup>た<sup>た</sup>し

と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>よう<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>解<sup>かい</sup>釈<sup>しやく</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>る</sup>。(播<sup>はり</sup>磨<sup>ま</sup>国<sup>こく</sup>風<sup>ふう</sup>土<sup>ど</sup>)

記<sup>き</sup>揖<sup>い</sup>保<sup>ほ</sup>郡<sup>ぐん</sup>上<sup>かみ</sup>岡<sup>おか</sup>の<sup>の</sup>里<sup>さと</sup>条<sup>じょう</sup>の<sup>の</sup>「<sup>ある</sup>一<sup>いち</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、<sup>云</sup>

々<sup>々</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しょう</sup>」

船<sup>ふね</sup>塚<sup>つか</sup>山<sup>さん</sup>、<sup>すか</sup>菅<sup>かん</sup>生<sup>せい</sup>山<sup>さん</sup>に<sup>に</sup>相<sup>そう</sup>当<sup>とう</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>、

水<sup>みづ</sup>、<sup>な</sup>擬<sup>ぎ</sup>え<sup>え</sup>名<sup>な</sup>付<sup>づ</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>、<sup>み</sup>耳<sup>みみ</sup>成<sup>なり</sup>山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>曰<sup>い</sup>

成<sup>なり</sup>の<sup>の</sup>青<sup>あき</sup>菅<sup>すが</sup>山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>呼<sup>よ</sup>ば<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>。

万<sup>まん</sup>卷<sup>くわん</sup>一<sup>いつ</sup>五<sup>ご</sup>二<sup>に</sup>に<sup>に</sup>、

「<sup>や</sup>日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>の<sup>の</sup>青<sup>あき</sup>香<sup>かう</sup>貝<sup>かい</sup>山<sup>さん</sup>」

「<sup>う</sup>敵<sup>てき</sup>火<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>瑞<sup>みづ</sup>山<sup>さん</sup>」

「<sup>み</sup>耳<sup>みみ</sup>高<sup>こう</sup>(<sup>あ</sup>成<sup>なり</sup>)<sup>の</sup>青<sup>あき</sup>菅<sup>すが</sup>山<sup>さん</sup>」

と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>。

先<sup>せん</sup>述<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>



⑤ 1921<sup>P</sup> いわかん えん/61<sup>P</sup> 小島  
異和感 ちくばな ⑥ 1917<sup>P</sup> 1/4  
感1

コクヨ ケー20 20×20



万④-120<sup>P</sup> 3790) 入水 1064<sup>P</sup>

2.053<sup>P</sup> - 3/2

の 陳ハ3 1027<sup>P</sup>

万④-121<sup>P</sup> 潜 万④-121<sup>P</sup>

天つ主改行

Q 42 121

無耳の池

ところで、万巻十六ー三七八ハに、こう歌

わけている。

無耳の

池し恨めし

吾妹子が

来つつ

潜かは

水は涸れなむ

人々

耳梨の池は恨めし

あの娘が

さまよつて来て、水にはいったら、水が涸れ

て死ねないようにしてくれればよかつたのに

三人の男に言い寄られた娘が、無耳の池の

水底に沈んでしまった。その哀顔を、三人

の男達がそれぞれ心を陳べて歌を作った。

その三首のうち、一番初めに載せられている

いうまでもなく、確証はないが、あるいはこの歌は

その昔、耳梨(彌彌那利)が入水して

死んだことを暗示しているのかも知れない。

そして一つ飛ばした歌、万巻十六ー三七九

の、こう歌われている。

あしひきの玉纒の兒、今日の如

いづれの隈を見つつ来にけむ

【大意】死におくれれた自分は、今日ニこ

無



2.054<sup>p</sup>-1/2

こと

135

その次の万巻十六三七八九に  
あーひきの山繻の兒 今日ゆくと  
わめに告げせば 還り来まーを  
BS 135 繻の繻児が 今日耳梨の池に死にに行く  
と、まえもって私に知らせてくれたならや死  
なせぬに、お前を助けて帰ってきたであ  
ろうに  
とある。

は、こころ歌う  
あーひきの玉繻の兒 今日けふの如  
いづれの隈を見つつ来にけむ  
繻児に先だたれ死におくれた自分は今  
BS 135 繻児に先だたれ死におくれた自分は今



H30 (2018) 5.22 (火) ~ 5.23 (水) 往車 2253 金 1931 P  
H31 (2019) 4.23 (木) 往車 2253 金 1931 P  
H10.8.8 (火) 往車 2253 金 1931 P  
H26.8.2 (土)

2,054 P - 3/2

→ H2.9.15 (土) ⑥

H31 (2019) 1.18 (金) ~ 1.19 (土)  
令和元 (2019) 6.23 (金) ~ 6.24 (土)  
令和2 (2020) 1.31 (金) ~ 2.1 (土)  
令和2 (2020) 10.14 (木) ~ 10.16 (土)

10% IF 10%  
10% 15%

耳の池あたりに来て、さまよって歩いている  
場所を求めて、どのあたりを、今日の自分の  
ように、さまよって歩いていたのだらうか  
・赤女もその時、タクマが原をあてどなく上  
まよって歩いてやってきて、梯橋にいます  
の新王城を北にのぞむ小さな池の端に立ち、  
身を投げたのであろう  
・都が、タクマが原から白川北岸の合志原に  
移された為、この頃にはすでに、タクマ  
が原に住むことも、この一帯を往来すること  
も許されていたのだらう、と想像される  
(第二十八章へ立入禁止地区の項の末尾参  
照)

＊

三人の男がそれぞれ、梯橋に成  
り代わって、歌を作ったのではなからうかとも  
思われるが、定かでない。